

# 視覚に障がいのある児童・生徒を対象とした

## 彫刻の鑑賞教育実践に関する研究

— ワークショップ実践における言語的・非言語的反応からの考察 —

**A Study on Sculpture Appreciation Education Practice**

**for Visually Impaired Children and Students**

— **A Consideration on Verbal and Nonverbal Responses in Workshop Practice** —

坂本 健・本多由佳梨

Ken SAKAMOTO, Yukari HONDA

尚絅大学短期大学部 教授／崇城大学芸術学部 非常勤講師

Professor, Shokei Junior College / Part-time Lecturer, Department of Fine Arts, Sojo University

キーワード：視覚障害教育、彫刻、鑑賞教育、ワークショップ実践、言語的・非言語的反応

Keywords: Education for the Visually Impaired, Sculpture, Appreciation Education, Workshop Practice, Verbal and Nonverbal Responses

### Summary

The authors have been conducting research related to the learning of “arts and crafts” and “art departments” for visually impaired children and students. The issues of practice and research encompassed “consideration based on ‘appreciation’ toward back-and-forth linkage” and “consideration from the perspective of production methods and processes.”

Therefore, in this study, we consider the ideal way of imparting appreciation education of sculpture with “core observations and experiences” for visually impaired children and students, while being cognizant of the “quality of experience” by focusing on “production methods and processes” as well as materials. As a method, we consider the verbal and nonverbal responses of children and students for each of the eight works exhibited in the workshop practice.

The findings reveal that the learning of “appreciation” with an awareness of not only the material but also the “method and process of production” as the “quality of experience” can be a “core observation and experience” for children and students with visual impairments. This leads to a back-and-forth relationship with the learning of “expression,” which begins with the learning of “appreciation.”

## 1. はじめに

視覚に障がいのある方が美術の鑑賞をするに際しては、鑑賞対象は彫刻、あるいは立体作品が多く、方法としては「触覚」を通じて行われることが主である。このことを踏まえ、熊本県内において1990年から開催されているのが熊本県文化協会<sup>(1)</sup>主催の「手でみる造型展」<sup>(2)</sup>である。この展覧会では、出品された全ての作品に手で触れて鑑賞することができ、2020年には第30回展を迎えた。熊本県文化協会の「手でみる造型展ホームページ」では、「…手から心へ…」と題して、以下のように紹介されている。

手でみる造型展は、文字どおり手で触ってみる、そして感じ取っていただく、展覧会です。

造型作品を視覚障がいの方々に見て、触れていただきたいということ、誰もが手にとって見る、あるいは、手で触れてみるという本来の鑑賞方法を実現してみよう、という二つの目的からこの展覧会が企画されました。

出品者は、熊本県美術家連盟・熊本県美術協会の協力を得て、主に県内の彫刻家・造形作家・熊本大学美術科及び県立盲学校の児童生徒を中心としております。<sup>(3)</sup>

その30年に及ぶ開催の歴史の中で、上記にあるように熊本県立盲学校では幼稚部から高等部の幼児・児童・生徒が出品、また実際に会場に赴き、鑑賞を行ってき

り、その他、様々な事業を通じて連携を図ってきた。そして、坂本は第7回展（1997）以降、断続的に出品をしながら、第22回展（2012）からは実行委員として、第30回展に至るまで「手でみる造型展」、及び各種関連事業に携わってきた。また、本多も熊本県立盲学校在任中には実行委員会に参加し、事業にも携わってきた。

しかしながら、2020年の第30回展<sup>(4)</sup>を最後に、新型コロナウイルス感染拡大の影響により開催をすることができていない現状がある。そして坂本が実行委員長を拝命した2022年、感染拡大状況に注視しながら、第31回展の開催に向けて準備を進めていたが、熊本県内における再度の感染拡大に伴い、開催の2ヶ月前、実行委員会の判断により開催を断念した。熊本県立盲学校でも新型コロナウイルス感染拡大前と同様、3年ぶりの出品、また鑑賞に向けて準備を進めていたところであったが、その機会を失ってしまった。そのため、代替の事業として熊本県文化協会が同校において、鑑賞のための「手でみるワークショップ」を計画・主催し、坂本が講師を務め、本多も協力者として参加をしている。

本研究は、視覚に障がいのある児童・生徒を対象とした彫刻の鑑賞教育実践に関する研究であるが、その背景にはこれまでの「手でみる造型展」、及び各種関連事業と熊本県立盲学校の連携があり、稿者らはその実践と研究を積み重ねてきた。そこで本研究では、その成果と課題を基に、今回開催した「手でみるワークショップ」の実践における児童・生徒の言語的・非言語的反

応から、彫刻の鑑賞教育実践の望ましい在り方について考察する。

## 2. 本研究について

### 2.1 これまでの研究と課題

これまで坂本は、「手でみる造型展」に携わってきたことを契機に、本務先の学生が本展覧会に作品を出品するための教育・指導をしながら「触覚」に係る論考<sup>(5)</sup>、及びその「触覚」を通じて視覚的・触覚的に認知する「テクスチャー」に係る論考<sup>(6)</sup>を行ってきた。また、それと同時に坂本が彫刻領域における見地、本多が特別支援教育における見地から共同で研究・考察を行い、「視覚に障がいを持つ児童・生徒を対象とした彫刻領域における『表現』と『鑑賞』に関する研究～『手でみる造型展』におけるワークショップとギャラリートークの実践からの考察～」<sup>(7)</sup>を著してきた。

こうした、実践に基づいて進めてきたこれまでの研究の中で、視覚に障がいのある児童・生徒を対象とした彫刻領域の「表現」と「鑑賞」に関する研究においては、2つの視座と課題を得た。

1つ目は、前述の共著における主たる目的であった「表現」と「鑑賞」の連関の在り方という視座である。同著においては「第30回手でみる造型展」におけるワークショップとギャラリートークの実践から考察を行い、以下のように述べている。

生徒たちはワークショップで動かした身体の記憶を辿って、自分の経験と重ねながらより意識し、想像を膨らませて作

品を触っていたと考えられる。その時、ワークショップにおける「表現」の活動の中で生まれた素材への探究心や好奇心が「鑑賞」の質を上げていた。<sup>(8)</sup>

このように、ワークショップにおける「表現」の体験的学習が、ギャラリートークでの「『鑑賞』の質を上げて」いると考察しており、「表現」と「鑑賞」の連関の有用性については一定の立証をすることができた。ただ、あくまでも「表現」から「鑑賞」への一方向的な連関であり、両者の往還的連関までには至っていないこと、そして「鑑賞」を起点とした考察が不十分であることが課題として挙げられる。

そして2つ目は、上記引用中でも触れているが、図画工作科・美術科の学習指導における素材への理解の重要性という視座である。同著においては、ワークショップやギャラリートークに参加した児童・生徒の感想を分類・分析した結果として、素材の観点も含めた「作品を構成する要素に関すること」についての言及が多かったことを挙げている<sup>(9)</sup>。さらに、この言及はワークショップ、及びギャラリートークの両者に共通して見られたばかりではなく、ワークショップでの体験的理解が、ギャラリートークにおける鑑賞活動への連関が示されていたため、以下のように述べている。

視覚に頼らない生徒たちにとって、表現材料・素材への興味・関心の広がり「表現」と「鑑賞」を有効的に連関させるカギの一つであった。<sup>(10)</sup>

このワークショップとギャラリートークの実践から、触察を大切にする視覚に障がいのある児童・生徒における「表現」と「鑑賞」の活動では、素材を主軸として展開していくことの有効性が立証された。ただ、その過程においては「素材をどのように扱って表現するのか」という思考にまで至っている<sup>(11)</sup>。生徒の姿が見られたが、「制作の方法と過程」の視点については考察が及んでいないことが課題として挙げられる。なお、前述の児童・生徒の感想を分類・分析した結果としても「発想や表現方法・技法に関すること」についての言及は多かった<sup>(12)</sup>。

## 2.2 目的と方法

そこで本研究では、視覚に障がいのある児童・生徒を対象とした「表現」と「鑑賞」の往還的連関を目指して、これまでの研究成果と課題に基づき論考を進めていく。成果とは「『表現』と『鑑賞』の連関の有用性」と「素材を主軸として展開していくことの有効性」であり、課題とは「往還的連関に向けた『鑑賞』を起点とした考察」と「制作の方法と過程の視点を持った考察」である。

視覚障害のある児童・生徒は、視覚による情報が得られにくいため、限られた情報や経験の中でイメージや概念が形成されやすく、理解が一面的であることがあり、言葉の背景にある心情や意味を理解したり、人の心情を表すような仕草に関するイメージや概念をつかんだりすることが難しい。例えば、「雲を掴む」というような言葉を知っていても、的確なイメージを持つこと

ができていないことも見受けられる。物質の形態の変化や運動・動作を伴うものは、イメージや概念を形成しにくいという実態がある。そのため、学習指導においては、「体験を通してイメージをつくり、そのイメージを言葉で表現してみる、そして教師や友達とコミュニケーションによってイメージを深め確かなものにしていく」ことが大切で、保有する身体感覚などを十分に活用して「体験の質」を意識し、物事の基本的な構成をとらえられるような「核になる観察や体験」が必要である<sup>(13)</sup>。

そこで、前述の課題を踏まえ、本研究では素材とともに「制作の方法と過程」についても着目をするという「体験の質」を意識しながら、「核になる観察や体験」を伴った「鑑賞」の学習を通じ、「表現」の学習との往還的連関へとつなげていく方向性を探る。そして、彫刻の鑑賞教育実践におけるより有効的な手法を明らかにし、提案することを目的とする。

その方法として、まずは本研究の背景となる「手でみる造型展」と熊本県立盲学校のこれまで連携について確認をしていく。それは前述の共著において、「鑑賞の質」を高める「その土台をつくったのが彫刻領域における専門的見地を持った人材との刺激ある交流だった」<sup>(14)</sup>と述べており、その機会が「手でみる造型展」となり得ているからである。また、前述の児童・生徒の感想からも「手でみる造型展」への期待は大きく、前向きであり<sup>(15)</sup>、この連携には意義があると考えられるからである。

そしてその上で、今回開催した「手でみるワークショップ」の実践から考察をして

いくが、具体的には、実施の概要と指導案を提示しながらワークショップの実際を示し、その実践において展示した8点の作品ごとの児童・生徒の言語的、及び非言語的反応から「体験の質」や「核になる観察や体験」に係る考察をする。

なお、本研究に係る先行研究は、近年様々な視点から展開されている<sup>(16)</sup>。その中には、本研究と同じく彫刻の鑑賞教育実践に視点を定めた「視覚障害のある高校生の彫刻鑑賞における対話的支援の役割」（半田こづえ：2018）等がある<sup>(17)</sup>が、これらと本研究の差異としては、本研究が対象を小学部から高等部と幅広く設定した「表現」と「鑑賞」の往還的連関に向けての考察である点や視点を素材と「制作の方法と過程」に定めている点が挙げられる。そして同時に、背景として「手でみる造型展」と熊本県立盲学校のこれまで継続して連携してきた取り組みを備えている点がある。

### 3. 背景としての「手でみる造型展」と熊本県立盲学校との連携について

ここでは、本研究の背景となる「手でみる造型展」と熊本県立盲学校のこれまで連携してきた取り組みについて確認をしていく。

これまでの出品や実行委員として関与してきた経験を踏まえながら、周年事業として発行された記念誌<sup>(18)</sup>や「触覚」を用いて鑑賞することができる展覧会を体系的・体系的に調査しながら、「手でみる造型

展」の意義について考察した論文（吉川瑠美：2006）<sup>(19)</sup>を基に、坂本は「『手でみる造型展』の省察と展望」（2023）<sup>(20)</sup>を著している。この拙稿は、「手でみる造型展」の実際についてを概略的・総括的に整理しながら省察、そして第31回展以降の展望について考察したものであり、その目的は、30年間継続してきた文化事業の記録として概要を整理して残すこと、また、考察した展望をもって本展覧会の更なる発展、そして社会的・文化的・教育的発展に寄与すること目指したものである。本章では、この拙稿で整理、省察した中から、熊本県立盲学校に係る事項についての概略を記す。

#### 3.1 出品と鑑賞

「手でみる造型展」の第1回展は1990年9月に熊本県立劇場テアトロギャラリーで開催されている。出品者は彫刻に携わる実行委員や熊本県美術協会<sup>(21)</sup>、熊本県美術家連盟<sup>(22)</sup>に所属する作家、熊本大学教育学部美術科の学生・卒業生等であり、34点の作品が展示された。その内には、熊本県内の作家ではないが抽象彫刻の先駆者として知られる堀内正和（1911–2001）の作品が、当時の実行委員長である三浦洋一の所蔵作品として貸与・出品がされている<sup>(23)</sup>。この第1回展においては、熊本県立盲学校からの出品はないのであるが、「手でみる造型展」への案内と招待がされており、主催の熊本県文化協会には、鑑賞後に同校からお礼の手紙が送られている。前述の周年事業として発行された記念誌に掲載されている、その内容を以下に引用する<sup>(24)</sup>。

### 【小学部児童】

せんじつはてでみるぞうけいてんに  
しょうたいくたさってありがとうございます  
ました。(中略)

このたびのぞうけいてんでは、どんな  
かんじがするかなどははっきりわかりまし  
た。たいへんたのしかったです。(後略)

### 【中学部生徒】

てでみるぞうけいてんというめずらし  
いもよおしものをひらいてくださってあ  
りがとうございました。わたしはむかし  
せいがんしゃだったので、よくちょうこ  
くやえなどをみていました。ちょうこく  
をてでさわってみるのははじめてでした  
が、やはりめでみるようにははっきりわ  
かりませんでした。でもめではかんじ  
ることができないちょうこくにふれたとき  
のかんしょくはよくわかります。すぎの  
きでつくったちょうこくのおいもかい  
でみましたが、つーんとしたいいにおい  
がしました。おんなのひとはだかの  
ちょうこくはてざわりがなめらかでせな  
かのきょくせんがこまかくひょうげんし  
てあるなどかんしんしてしまいました。  
(後略)

上記からは、「手でみる造型展」におけ  
る鑑賞を楽しんだ様子とともに感触、匂  
い、形態の把握等についても触れており、  
「核になる観察や体験」となり得たことが  
窺える。

そして、第3回展以降は熊本県立美術館  
本館、もしくは分館で開催されており、第  
5回展には「友情出品」として熊本県立盲

学校の児童・生徒の出品記録が残されてい  
る<sup>(25)</sup>。その後も児童・生徒は出品を続  
け、会場に赴き、開会式にも参加する等、  
鑑賞の機会が設けられている。

### 3.2 周年事業「ワークショップ」<sup>(26)</sup>

ワークショップは第10回展(2000)、第  
30回展(2020)において開催されている。

第10回展では、会期中に熊本県伝統工  
芸館において、実行委員の2名と、同じく  
実行委員でもあった当時の熊本県立盲学校  
教諭の森本が講師として熊本県立盲学校の  
生徒17名、熊本市立若葉小学校の5年生  
32名を対象に行われている。内容は野菜  
を手で触って観察をしてから粘土で作ると  
いうものであり、熊本市立若葉小学校の児  
童はアイマスクを着用し、手で触って観察  
するということを深める取り組みを行っ  
た。また、制作活動は学校の区別なく作っ  
た班ごとに行われ、児童・生徒同士が一緒  
に活動することで交流を深めることができ  
ている。

第30回展では、会期前に熊本県立盲学  
校において、坂本を含めた実行委員2名が  
講師として、当時同校に在任中の本多とと  
もに中学部生徒4名を対象に行っている  
(図1)。内容は「土粘土を使った自刻像  
(マスク)づくり」であり、制作にあたっ  
ては自分の顔をしっかりと触ってみること  
から始め、頭部前面全体の形態を念入りに  
確認していきながら、それぞれが自身の特  
徴を捉えた、表現豊かな作品が完成した。  
また制作後には、講師自作のマスクを鑑賞  
しており、同じテーマ、手法で制作された  
作品と自身の作品を比較しながら体感する

とともに、自身の制作を振り返る機会となった。

なお、ここで制作された作品は坂本が型取りをし、展示、及び鑑賞可能な石膏に置き換えることで「第30回手でみる造型展」へ出品をしている。

### 3.3 周年事業「ギャラリートーク」<sup>(27)</sup>

第30回展では、会期中に会場である熊本県立美術館分館において、坂本を含めた彫刻家3名が講師として熊本県立盲学校小学部児童6名、中等部生徒8名、高等部生徒8名を対象として本多の引率、指導のもと、ギャラリートークを行っている(図2)。内容は作品に触れて鑑賞をしながら、制作者である講師の話の聴いたり、質問をしたりすることで作品をより深く理解し、感じることを目的とした。方法としては、例年は各自が教諭とともに自由に作品を巡っていたが、この時は3名の講師が自身の作品の前に立ち、グループに分かれた児童・生徒が順番に回っていった。児童・生徒は作品に触れながら、友達同士や教諭と対話をしながら鑑賞をした。そこでは、形態的な鑑賞に終始せず、素材にもたいへ

んな関心を寄せていた。

また、前述のワークショップでの作品も展示してあり、ワークショップに参加した生徒は、石膏に置き換わった自身の作品を初めて鑑賞し、形態こそは同じものの異なる材質となった自身の作品に不思議がる様子を見せるとともに、非常に喜ぶ姿があった。この「形態こそは同じものの異なる材質となった自身の作品」を鑑賞することは、土粘土から石膏に置き換わるという「制作の方法と過程」という視点を孕み、「体験の質」として「鑑賞」の学習における影響を与えたのではないかと考える。

## 4. 「手でみるワークショップ」の実践と考察

### 4.1 概要

開催に際しては、講師である坂本と熊本県立盲学校が学習指導内容・方法における連携を図るために事前に概要、及び指導案を坂本が作成し、共有している(図3・4)。

展示する作品は全て坂本の自作とし、グループの数に合わせて6～7点を想定して



図1 第30回展ワークショップの様子



図2 第30回展ギャラリートークの様子

## 熊本県立盲学校 彫刻鑑賞ワークショップ概要

尚綱大学短期大学部幼児教育学科  
准教授 坂本 健

### 1. 日時

令和5年3月6日(月) 2限目(9:50~10:40)

### 2. 場所

熊本県立盲学校 共同教室

### 3. 参加者

小学部児童13名、中学部生徒6名、高等部生徒7名 計26名

### 4. 概要 ……詳細は学習指導案略案を参照

講師(坂本)の彫刻作品(6~7点程度)を会場に展示し、6~7のグループに分かれて鑑賞をする。鑑賞に際しては、モチーフ、形態、素材、方法等の視点を提示する。講師は各グループを回りながら適宜解説をしていく。その後質疑応答を経て、印象に残った作品等についての感想を述べる。

#### 【活動の流れ】

9:00 会場準備(作品設置)

9:50~10:40 鑑賞ワークショップ(50分) : あいさつ号令( )

①講師自己紹介、及び鑑賞説明

②作品鑑賞(6~7グループに分かれて)

③質疑応答

④児童・生徒感想 : 小( ) 中( ) 高( )

10:40~11:00 会場撤収

### 5. 備考

- 事前にグループ分け(小:3グループ、中:2グループ、高:2グループ等、もしくは縦割り)をし、作品はグループ数に応じて準備する。
- 会場は鑑賞に十分なスペースをとることができる共同教室を使用し、机等、作品を展示できる机や台等を準備する
- 本活動後、各児童・生徒の振り返りや感想を書くようにする。

図3 熊本県立盲学校 彫刻鑑賞ワークショップ概要



## 熊本県立盲学校 彫刻鑑賞ワークショップ学習指導案

日 時 令和5年3月6日（月） 第2校時

指導者 尚絅大学短期大学部准教授 坂本 健

### (1) 目標

- 様々なモチーフ、形態、材質、方法等の視点を意識しながら鑑賞することができる。
- 保有する感覚を活用して彫刻作品を捉え、言葉と対応させながら説明したり、感想を述べたりすることができる。

### (2) 評価

- ①保有する感覚を活用して様々なモチーフ、形態、材質等を感じ取ることができたか。（観察・感想）
- ②直接体験を通してイメージを形づくり、感じたことや考えたことを友達と共有したり、感想を述べたりすることができたか。（観察・感想）

### (3) 展開

学習過程	時間	学習活動	支援・指導上の留意点	備考
導入	4 3	1. 指導者自己紹介と活動の流れについて聴く。 2. 鑑賞の視点について考える。	・グループで7つの彫刻作品を順次鑑賞し、最後に感想を述べることを伝える。 ・モチーフ、形態、材質、方法等の視点を伝え、意識しながら鑑賞するように促す。	彫刻作品8点 (指導者作)
いろいろな形や素材でできた作品をたくさん触って鑑賞しよう				
展開	30 4	3. グループに分かれて作品を鑑賞する。 4. 質問や疑問に思ったこと等を講師に聴く。	・1つの彫刻作品に対して1つのグループが鑑賞をするようにし、グループ内で感じたことや考えたことなどを伝え合い、共有するように促す。（評価①・②） ・指導者はそれぞれのグループを回り、質問等に対応する。 ・その場で出た質問や疑問に対応すると共に鑑賞中に出た質問等を全体で共有できるようにする。	
まとめ	7 2	5. 印象に残った作品等についての感想を小学部・中学部・高等部それぞれから発表する。 6. 講師のまとめの話を聴く。	・モチーフ、形態、材質等の視点からだけでなく、自身が感じたことや考えたことについても述べるように促す。（評価②） ・感想に対するフィードバックと彫刻制作者としての思いを伝え、今後の手でみる造型展についての話をする。	

図4 熊本県立盲学校 彫刻鑑賞ワークショップ学習指導案

いたが、様々な素材と技法によって制作された、様々な形態の作品を鑑賞対象とするために選定した結果、当日は8点を展示している。詳細については後述するが、作品の主たる素材は石膏3点、陶（黒陶土・信楽古陶土等）3点、FRP<sup>(28)</sup> 1点、ブロンズ1点である。

そして、会場となる熊本県立盲学校共同教室における作品設置のレイアウトについては、広く空間を確保し、どの角度からも触れて鑑賞することができるように設置方法について考慮した。通常、彫刻作品の展示に際しては台座等に載せる場合が多いが、安全面の確保、そして作品に触れやすくするために床に直置きし、小さい作品は

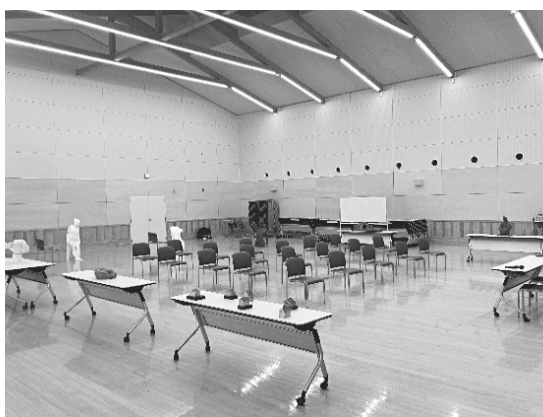


図5 「手でみる」ワークショップ会場の様子

机の上に展示することとした（図5）。

なお計画段階では、活動後に各児童・生徒の振り返りや感想を書く予定であったが、時間の確保が難しいという都合上、鑑賞後に代表児童・生徒が感想を述べるにとどめた。

#### 4.2 ワークショップにおける指導の実際と考察

当日は、熊本県文化協会村上輝和会長の挨拶から始まり、講師の自己紹介、活動の流れを説明した後、鑑賞説明を行ったが、以下の点について意識しながら鑑賞することができるように促している。

- i 素材
- ii モチーフや形態
- iii 触り方
- iv 制作の方法

「i」については、石膏・陶・FRP・ブロンズを主とする様々な素材があり、その手触りや感触を感じてほしいことについて述べた。「ii」については、人をモチーフにした作品が多いが、腕や頭部がなかったり、様々なポーズをしていたり等、そして人以外のモチーフが何であるのか等、その形態を感じてほしいことについて述べた。

「iii」については、安全性への配慮も含め、はじめは優しく触り、全体の様子を掴むことができたら細部まで触ってみるよう伝えた。そして、十分に注意した上で、持ってみるとどのくらいの重さであるのか、叩いてみるとどのような音がるのかを感じてほしいことについて述べた。

「iv」については、様々な素材がどのようにして制作されたのかについて考えてみることを促し、分からなかったり、疑問に思うことがあったりした場合には、いつでも質問するように伝えた。

校種や年代によって理解は様々であったのかもしれないが、事前に鑑賞の視点について整理し、伝えることで、鑑賞に際して形態の把握のみに終始しないような各種視点の提供、そして素材と「制作の方法と過程」に焦点化することを試みた。

その後、各校種で作られたグループに分かれ、8点の作品を巡る形での鑑賞が始まったが、坂本と本多は児童・生徒が鑑賞する様子を窺いながら、指導、そして質問に応えたり、鑑賞の視点について再度説明をしたりしながら児童・生徒と関わっていった。

それでは、それぞれの作品についての詳細等を記すとともに、児童・生徒の言語的・非言語的反応も記し、それに基づいた「体験の質」や「核になる観察や体験」に係る考察をすることとする。なお、児童・生徒の言語的・非言語的反応は坂本・本多、熊本県文化協会吉良香織氏、及び熊本県立盲学校の先生方の観察・聴き取りを基に抽出し、節末に一覧を掲載（表1）、そして本研究の目的に係る反応をそれぞれの作品ごとに掲出している。

また、今回の鑑賞においては、前述の視点に焦点化させるために作品のタイトル等は提示していない。これは、鑑賞に際して言語的イメージを付加させることを避けるためであり、児童・生徒からも作品のタイトルを尋ねるような質問はなかった。その

ため、本稿においては便宜上、「作品A～H」で記すこととする。

#### 4.2.1 作品A



図6 作品A

【サイズ】 H48 × W26 × D52 (cm)

【材 質】 石膏

作品の表面は粗目のヤスリで削られているが、顔のパーツごとの量は整えているため、形態は把握しやすい。大きさとしては一般成人の頭部よりもやや大き目となっており、頭部のみということ一つひとつのパーツを丹念に探りながら、自身の顔を触りながら鑑賞する様子が見られた。また、実際に持つてみることで重さを感じていた。

そして、本作品は色や質感を落ち着かせるため、仕上げに水に溶いた土をかけているが、それが乾燥し、付着している様子を感じ取った中学部生徒もいた。その方法と目的に疑問を感じていたため説明すると、制作者としてのねらいは視覚的に理解する

ことは困難であったが、触覚的に理解をすることができたようであった。

なお、本作品は今回参加できなかった児童・生徒のために、ワークショップ終了後も当校に貸与・展示がされている。このことは「作品を校内の適切な場所に展示するなどし、日常の学校生活においてそれらを鑑賞することができるように配慮すること。」<sup>(29)</sup>という『特別支援学校小学部・中学部学習指導要領』の内容につながる。ここで言う「作品」とは、児童・生徒のものだけに限らず、「日々の学習の成果である作品や学校に永く残す作品」、「親しみのある美術作品」<sup>(30)</sup>という観点から、本ワークショップでの「核になる観察や体験」に基づく、振り返りという意味においても意義があると考えられる。

#### 4.2.2 作品B

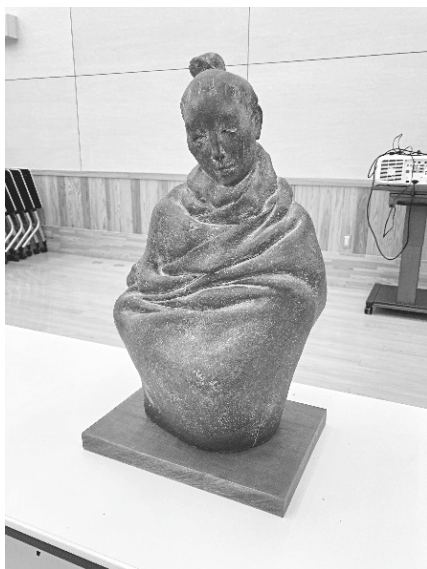


図7 作品B

【サイズ】H52 × W45 × D22 (cm)

【材質】陶(黒陶土)・木(鬼ぐるみ)

目の細かい粘土の質、そして焼成前に目の細かなヤスリで削っているため、同じく陶を素材とする「作品G・H」と比べ、陶特有の質感はあるが、表面は滑らかなテクスチャー<sup>(31)</sup>となっており、その違いについて言及する姿が小学部から高等部の児童・生徒で多く見られた。同じ陶であっても素材の質や「制作の方法と過程」により質感が異なることの気づきを得たようであった。

頭部は小さ目で顔のパーツを認識しづらく、身体部も布で覆われた抽象的形態であったため、形態の把握は難しかったようである。ただ、人であることが分かると、布の下でどのようなポーズをしているのか、実際に自分でもポーズをとりながら想像し、友達や教諭と伝え合っている姿が見られた。

実際に持って重さを感じようとする児童・生徒もいたが、普段使っている茶碗や皿等の陶器と同じく、割れやすい素材であることを知り、躊躇する姿も見られた。ただ、軽く叩く姿はあり、他の素材との違い、そして本作品は空洞であるため音が響く様子を感じていた。

#### 4.2.3 作品C

他の作品に比べ、作品のサイズに対しての重さは軽い作品である。感触もプラスチックそのままの印象を持ち、その軽さの理由にも興味を示していた。作品の中は空洞となっており、作品を持ち上げて空洞の様子を触ることで、非常に驚いた様子を見せていた。そして、作品を叩くことでプラスチックという素材、そして空洞であると



図8 作品C

【サイズ】 H101 × W62 × D45 (cm)

【材 質】 FRP

いうことに起因する音の軽さを感じていた。

「制作の方法と過程」について説明をすると、液状のプラスチック（ポリエステル樹脂）に硬化剤を混ぜることで硬化させることに興味を示していた。

#### 4.2.4 作品D

小学部児童が自身の身長とほぼ同じであったため親近感を示し、横に並び、同じポーズをとりながら鑑賞をしていた。身体的模倣は視覚・触覚等とはまた異なる方法での鑑賞であると言える。その他、抱きついたり、抱きかかえようとしたりする姿も見られたが、かなりの重量であるために断念をしていた。なお、石膏の作品は3点あるが、その中でも本作品は強度的な問題もあり、密度が高い状態のものであるため、他の石膏を素材とする2作品と比べ、叩く

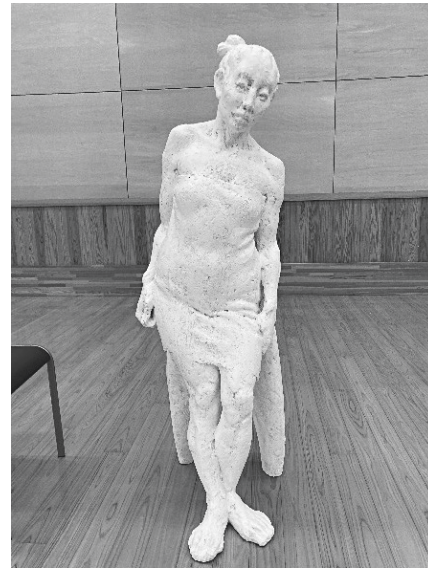


図9 作品D

【サイズ】 H118 × W30 × D35 (cm)

【材 質】 石膏

と重い音をさせていた。

本作品は、今回展示した作品の中で一番大きな作品であり、背部に別の物体があるものの、2本の脚で立っている様子に「制作の方法と過程」に関する疑問を持っていたため、鉄芯に木や針金、棕櫚縄で作った芯棒を結びつけ、土粘土で造形したことを伝えた。自身のこれまでの粘土制作の経験と照らし合わせてイメージすることで、その差異を感じると共に、大きな作品を粘土で作る方法と困難さを感じていた。

#### 4.2.5 作品E

頭部、腕、下半身がないことに興味を示す児童・生徒が多く、首、腕の断面をしきりに触る様子が見られた。また、鑑賞後の高等部生徒代表の感想でも「印象に残った彫刻は頭の無い彫像で、顔がないからどんな表情か想像することができた。」と述べ



図10 作品E

【サイズ】H96×W44×D46(cm)

【材 質】石膏

られていた。

また、制作者である坂本の意図として、身体に巻いてある布は柔らかな様子をあらわす表現として造形しているが、実際の素材としては石膏であり、そのイメージを結びつけることが難しかったようである。しかし、布のヒダを辿るように触り、形態的な鑑賞を楽しむことはできていた。

なお、「制作の方法と過程」についてであるが、本作品の布部分は水に溶いた石膏に実際の布を浸して形態の基礎としたものであり、その説明自体は理解できたようであったが、イメージすることは難しかったようである。ただ、ギプスの話をすることで多少は納得ができた様子であった。

#### 4.2.6 作品F

本作品は坂本自身が蠟型鑄造<sup>(32)</sup>したものであり、その「制作の方法と過程」につ



図11 作品F

【サイズ】H12×W38×D27 (cm)

【材 質】ブロンズ

いては特に中学部・高等部生徒は大きな関心を示していた。作品の内側には溶けたブロンズを流し込む湯道<sup>(33)</sup>の跡(図12)が残っており、安全に気を付けながら丹念に触っていた。また、高等部生徒に対して教諭が社会で学習する「銅鐸」を例に出して話をすることでさらに興味を示し、理解も深まったようであり、他教科との連関的学習となった。

そして金属であるため、非常に重いのだが、中等部・高等部生徒は挑戦的な態度と姿勢で持つことを試みていた。作品のサイ



図12 内側の様子

ズに対して、重さのイメージが釣り合わないことに面白さを感じていたようである。また、叩くことで音を感じようとする児童・生徒は多くおり、手で叩くと「痛い」と言いながら爪で叩き、金属特有の高い音を感じると同時に、空洞による音の反響も感じ取っていた。

なお、形態の把握が難しかったようで、鑑賞後の質疑応答では、小学部児童から「金属の像は丸かったり、細かったりしていますが、何を表していますか？」との質問があり、「大きなソファに女性が横たわっているところを表現しました。」と答えている。このことは「作品E」における布の把握の困難さと同様であり、視覚的にはそのモチーフ、本作品で言えば人体・布・ソファを区分して認識することができるが、触覚的にはブロンズという同一素材で表現されているため、その区分をすることが難しい。そのためワークショップ終了後、質問した児童を伴って、再度説明をしながら鑑賞をした。

#### 4.2.7 作品G

小さな作品であり、手に持ってそれぞれの形態の違いについて鑑賞しており、弱視の児童・生徒は、作品が家の形態であることに気づき、「誰の家だろう」という話が出ていた。また、全盲の生徒は、掌におさまる「ひんやり」とする感触を楽しんだり、教師との会話で家と分かったり、「穴がある」、「窓がいくつあるか」と会話をしながらの鑑賞を楽しんでいた。ただ、「家」というモチーフのイメージが先行してしまい、どの「家」が「好き」か、「住



図13 作品G

【サイズ】 左から H13 × W15 × D10 (cm)  
H17 × W15 × D13 (cm)  
H18 × W10 × D15 (cm)  
H18 × W11 × D12 (cm)  
H17 × W14 × D12 (cm)  
H16 × W17 × D13 (cm)

【材 質】 陶（信楽古陶土）・木（樺）

みたい」か等の言及が多かった。しかし先述のとおり、陶を素材とした他の2作品とのテクスチャーの違いについての言及はあった。

そして、「制作の方法と過程」についての質問等はあったものの、「作品B」との大きな差異はなく、鑑賞対象の作品としては小学部児童を中心に興味・関心が大きく、「欲しい」、「家に飾りたい」等の声があったものの、形態・材質・方法等、稿着らが意図する鑑賞の視点にまでは踏み込むことは及ばなかった。そうした意味においては、今回の選定としては適さず、反省点として挙げられるかもしれない。しかしながら、今回展示した一連の作品に変化をもたらし、様々な想像を膨らませながら楽しんでくれた様子が見られた点、そして掌に

収めながら鑑賞できる作品は本作品のみであり、「ひんやり」とする感触にまで意識が及んだ点については意義があったと考える。

#### 4.2.8 作品H

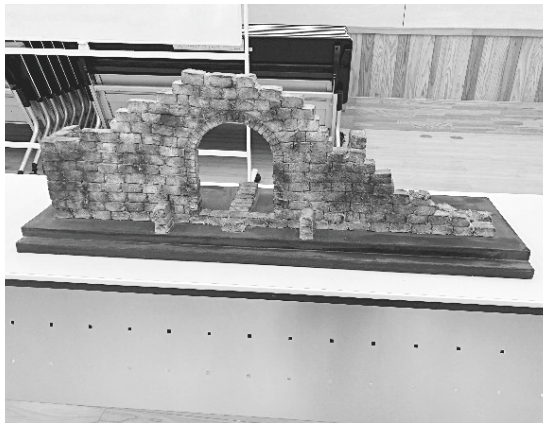


図14 作品H

【サイズ】H32×W68×D30 (cm)

【材質】陶(信楽他)・木(檜)・モルタル<sup>(34)</sup>

本作品は一つひとつのレンガのような形態を型にはめて土粘土で成形し、焼成したものをモルタルでつなぎ合わせたものである。そして、素材としては陶であるが、土粘土は様々な種類を使用しているため一つひとつの感触は異なり、また、ひび割れたものも混同しており、それらを楽しむ姿が見られた。児童・生徒の感想としては「猫の爪とぎのようだ」、「古い感じ」、「遺跡みたい」等、周囲からの視覚情報を得てイメージを膨らませていた。

「制作の方法と過程」については、多くの関心が寄せられた。上記のような説明に加え、アーチ部分の制作の方法については特に興味を示していた。例として、通潤橋

等の石橋の「制作の方法と過程」を挙げたが、構造的な理解はできたものの、視覚的経験がないため、イメージは難しかったようであった。しかし、小さなレンガのような形態を積み上げる「制作の方法と過程」を知り、四角い形を追って形を確かめており、そうした児童・生徒の反応からは、自らが制作者の立場で触っているような様子が窺えた。

### 4.3 総括的考察

ここまで、「手でみるワークショップ」の概要と実践における言語的・非言語的反応からの考察を進めてきたが、ここでは、さらに総括的な考察を行う。その視点としては、まず課題として挙げていた「制作の方法と過程の視点を持った考察」から述べ、その後、「往還的連関に向けた『鑑賞』を起点とした考察」を述べる。

#### 4.3.1 制作の方法と過程の視点を持った考察

まず前段として、素材の視点の重要性については前述したとおりであり、そのねらいをもって本ワークショップでは石膏、陶、FRP、ブロンズという4種類の素材の作品を選定し、展示している。その中で、触覚的に素材のテクスチャーを感じることは、これまでの図画工作科・美術科の学習を含めた日常的な経験、そして「手でみる造型展」を通じた取り組み等で慣れ親しんだ行為であったと言える。ただ、本ワークショップにおいては、通常の展覧会等では困難である「実際に作品を持ってみること」、「叩いて『音』を感じること」が可能



表1 児童・生徒の言語的・非言語的反応

		素材	形態・モチーフ	制作の方法と過程
作品A	言語	・「(土の付着で) ザラザラする」 ・「(表面が) 凸凹してる」	・「大きい頭」 ・「鼻が高い」 ・「下の(円柱)は何?」	・土の付着に対する質問
	非言語	・実際に持ち、重さを感じる	・目・鼻・口を丹念に探る ・自身の顔を触りながら鑑賞	
作品B	言語	・「作品G・H」と比べ、質感の違いに言及 ・「硬い音がする」	・「何の形か分からない」 ・「布の下はどうなってる?」	・どうして質感の違いがあるのかについての質問 ・「どうやって焼く?」、「何度で焼く?」
	非言語	・実際に持ち、重さを感じる ・軽く叩き、響く音を聴く ・割れやすい素材であることを知り、触ることを躊躇	・服の下でどのようなポーズかをとってみる ・布のヒダを追うように触る	・焼成で割れたヒビの説明後、恐る、恐る触り不思議がる
作品C	言語	・「軽い音がする」 ・「ツルツルしてる」	・何故、下半身・手の先が無いのかを質問	・FRPの硬化に関する質問
	非言語	・実際に持ち軽さに驚く ・軽く叩き、軽い音を感じる	・手首の先がないことを不思議がり、繰り返し触る	・中の空洞の様子を探る
作品D	言語	・「重たくて持てない」 ・「詰まった音がする」	・「後ろについてるのは何?」 ・「〇〇ちゃんと同じ大きさ」 ・「(大きさから判断し) 子ども?」	・「(二本足で立つためには) 粘土でどうやって作る?」 ・「こんなに大きいのは作れない」 ・「作るのにどれくらい時間がかかる?」
	非言語	・実際に抱きかかえようとして断念 ・軽く叩き、重い音を感じる	・(横に並んで) 同じポーズをとってみる ・抱きつく、手を握ろうとする	
作品E	言語	・「重たくて持てない」	・「頭と手と足がない」 ・「顔がないからどんな表情か想像することができた」	・「全部粘土で作った?」 ・「(石膏は) どうやって固める?」
	非言語		・首、腕の断面をしきりに触る ・布のヒダを辿るように触る	・作品下部の空洞を触る
作品F	言語	・「(手で叩き) 痛い」 ・「(作品内部を触り) 痛い」 ・「重すぎる」	・「丸かったり、細かったりしているが、何を表しているか?」	・「どうやって金属にする?」 ・「(湯道は) なんである?」 ・「(金属は) 何度で溶かす?」
	非言語	・挑戦的な態度と姿勢で持つことを試みる ・小さいのに重いことを不思議がる ・金属特有の高い音、空洞による音の反響を感じる	・布から出ている頭・手・足を探るように触る	・内部を触りながら、湯道の跡を気にする ・作品表面と内側の感触の違いについて考える
作品G	言語	・「ひんやりする」 ・「作品B・H」と比べ、質感の違いに言及	・「誰の家だろう」 ・「穴がある」、「窓がいくつあるか」 ・「(どの家が) 「好きか」、「住みたいか」	・「制作の方法と過程」についての質問等はあったが、「作品B」との大きな差異はなく興味が薄い
	非言語		・作品が小さいため、手で覆うように鑑賞 ・次々と様々な家を感じる	
作品H	言語	・「ザラザラしてる」 ・「(手で叩き) 痛い」	・「猫の爪とぎのようだ」 ・「古い感じ」、「遺跡みたい」	・「(レンガは) どうやって作る?」、「どうやってつなげる?」
	非言語	・一つひとつの感触の違い、ひび割れたものに気付き、楽しむ。	・四角い形を追って形を確かめる。	・制作の過程を知り、自らが制作者の立場で触っているような様子

であった。そのため、素材を認知していくための方法としては視覚的・触覚的体験のみならず、「音」を通じた聴覚的体験も今回は含有させている。素材を認知するに際して「音」は親和性が高く、重要な要因であると言えるし、こうした複合的な感覚を用いた体感には、素材に係る認識や理解をより深めていく。実際に、多くの児童・生徒は作品を持ち上げ、叩いて「音」を感じており、感想を述べながら素材の理解を深めていた。

その上で「制作の方法と過程」について論じていくが、本ワークショップの視点として提示したねらいは概ね達成されたと評価している。それは、「制作の方法と過程」に関する直接的な質問等の言語的反応、そして「制作の方法と過程」が現れている作品内部やその痕跡が残るテクスチャーの状態に興味を示すような非言語的反応を捉えることができたからである。限られた情報や経験の中でイメージを形成しにくい視覚に障害のある児童・生徒のこうした言語的・非言語的反応は、まさしく「体験を通してイメージをつくり、そのイメージを言葉で表現してみる、そして教師や友達とコミュニケーションによってイメージを深め確かなものにしていく」過程を経たからこそその表出であると考えている。

繰り返しになるが、視覚に障がいのある児童・生徒にとっては、図画工作科・美術科の学習のみならず、あらゆる場面において対象物がどのような素材であるのかが非常に重要な要素であり、それは多くの場合が触覚に頼って認知していく。そして、そ

の認知が及んだ時、次の思考として、どのような「制作の方法と過程」によって対象物がその形象となっているのかということへ移行する。今回展示した8点は全て塑造であり、粘土を用いて造形されている。粘土は熊本県立盲学校のみならず、視覚に障害のある児童・生徒にとっては慣れ親しんだ素材であり、そのほとんど全員が経験したことがある。ただ、陶芸に取り組んでいる学校であれば土粘土で器等に成形後に焼成したり、紙粘土が乾燥・硬化したりすることで、その状態の変化を感じることもあるが、それ以外の、粘土による造形から別の材質に転換するという経験は少ない。そのため、本研究においてはそこに焦点を当てている。

展示作品の制作者である坂本は、粘土原型を材質転換するに際して、あるいは転換後にその素材の特性に応じた付加的制作 (Ritocco リトッコ)<sup>(35)</sup>を行っているが、粘土による塑造的行為を基盤としていることは児童・生徒にはイメージや思考の起点となりやすく、その先の付加的「制作の方法と過程」に興味・関心を持つとともに思考が及びやすかったのではないかと考える。今回展示した作品には4種類の素材があり、それは素材の違いを感じると同時に、その素材がどのような「制作の方法と過程」を経ているのかという視点につなげていくことができた。この視点は「体験の質」を意識する上での視点となり得たと考えている。

#### 4.3.2 往還的連関に向けた「鑑賞」を 起点とした考察

まず、前項での考察からも「鑑賞」の学習における「体験の質」として「制作の方法と過程」の視点を意識することが「表現」の学習への連関の素地となり得ると言える。これは、文部科学省の掲げる「三つの柱」としての「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成）」<sup>(36)</sup>にも通じるものである。

そしてここで、熊本県立盲学校教諭（当時）森本の、第10回展におけるワークショップに対しての分析を以下に引用してみる。

目の見える学生は、野菜を触るとすぐに何の野菜かを思い描くことができる。その結果粘土で表現するときには全体から作り始め、次第に部分的に作るという工程をおこなう。しかし、盲学校の生徒は、触ったものが何か分からないため、触った印象を自分の中で再構築してそれを粘土に表現する。結果、特徴をまず作り始め、部分と部分の集合体として全体が出来上がる。<sup>(37)</sup>

これは、目の見える児童・生徒と視覚に障害のある児童・生徒の「表現」の学習における制作過程の特徴の違いについて述べたものであるが、図画工作科・美術科の学習における相違点が如実にあらわれている。「五感による知覚の割合」は視覚が83.0%を占めている<sup>(38)</sup>と言われており、その視覚に障害のある児童・生徒は視覚的情

報が少ない、あるいは無い中、視覚以外の感覚を用いて得た、森本の言葉を借りるならその「印象」を自身の中で再構築していくことが求められる。そして、その再構築をするにあたっては「印象」が漠然としたものであればある程、非常に困難であると言わざるを得ない。そのため、「鑑賞」において形態の把握のみに依拠するばかりではなく、素材、そして「制作の方法と過程」の視点を焦点を当てた「体験の質」を保証することで「印象」が明確になっていくと考える。つまり、保有する身体感覚などを十分に活用して、材質や構造、重さ、音、温度感、動き、関係性などを意識的に観察する実体験が、表層的な印象のみにならない「核になる観察や体験」となり、イメージや概念の多面的理解と「表現」の土台になる。さらには、次なる「鑑賞」の学習へも連関していくと考える。また、今回の実践に照らし合わせると、今後の「表現」の学習においては塑造制作に止まらず、型取りによる材質転換や焼成による状態変化等も組み込むことでその連関はより発展性を持って展開されていくと考える。

そしてもう一点、先述の吉川は前掲書中で「私たちからみて、危険ではないか、脆いのではないかとと思われる作品ほど視覚障害者にとって興味を引いた事例」<sup>(39)</sup>を紹介しながら、以下のように指摘している。

晴眼者が視覚障害者の鑑賞について、適切であると考えていることが視覚障害者鑑賞の可能性を妨げている場合もあるのである。（中略）視覚障害者に対して鑑賞の機会が増えはじめている今、視覚

障害者にとってより関心を引く作品を晴眼者が偏見を持たずに提供していくことが大事になって来ていると考える。<sup>(40)</sup>

このことは、視覚に障がいのある児童・生徒の立場や視点を備えない「鑑賞」の学習は、その機会と内容の広がりを狭めてしまう危険性を孕んでいることを指摘している。実際、稿者らの「鑑賞」の学習に関する研究は、これまで触覚に依拠した考察におおよそ止まっていたが、本ワークショップでの「作品B・D」の鑑賞に際して、小学部児童が作品と同じポーズをとり、身体的模倣をするという鑑賞方法をとることで素材から少し離れ、形態を感覚的に、体感的に捉えたり、作品の重心を想像したりすることができていた。こうした鑑賞の在り方を認め、実践的な方法として研究を進めていくことで、視覚に障がいのある児童・生徒の「鑑賞」の学習はより広がりや充実を持って迎え入れられ、「表現」の学習へと関連していくのではないかと考えるため、今後の課題としていきたい。

## 5. おわりに

今回、実践と考察をした「手でみるワークショップ」は、普段の図画工作科・美術科の学習とは異なる、特殊な状況下で行われている。まず、一人の制作者の様々な素材、モチーフ、技法を用いた作品を鑑賞し、直接的に質問ができた。また、普段使用している教室とは違う環境での学習は特別感や緊張感を生み、作品を鑑賞するにあたってのモチベーションや好奇心を高める

ことができた。そして、児童・生徒の在籍している学級の種別（一般学級と重複障がい学級）や学年を問わずに実施したことで、児童・生徒同士の素直な感想や会話、教師の促しによって作品の素材や形態から感覚的に捉えたものを言葉にすることができていた。このことは、自分の中でイメージを広げ、どんなことを感じているのかを意識する中で自己理解も深めたり、お互いの感覚を認め合ったりすることにつながることもできたのではないかと考える。これらに鑑みると、そうした意味でも今回の「手でみるワークショップ」は、「核になる観察や体験」となり得たのではないだろうか。

ただ、こうした学習体験は日常的に行えるものではない。その鍵を担っているのは「手でみる造型展」、及び関連する各種事業であると考えられる。そして、これまでの取り組みや実践も一定の成果を得ることができていたと考える。だが、図画工作科・美術科の学習として考えた時、その意義や意味を明確化し、更なる発展へとつなげることができていたかと言えば、不十分な点もあったと省察せねばならない。これまで潜在的であった図画工作科・美術科の学習における意義や意味を顕在化させ、成果と課題を見出しながら実践と研究を進め、より充実したものとしていきたいと考えている。

そして何よりも、熊本県立盲学校の児童・生徒が意欲を持って、積極的に「手でみる造型展」に関わり、楽しみながら図画工作科・美術科の学習を深めてくれることを願っている。鑑賞後の児童・生徒代表の

感想では、高等部の生徒が以下のように語ってくれた。

楽しみにしていた手でみる造型展が中止になって残念に思っていたが、今日このように自分たちのためにこのようなワークショップを開いていただき、感謝しています。(中略) 来年の「手でみる造型展」の開催を楽しみにしています。

この期待に応えることができるよう、本研究での考察、そしてこれまでの研究を基にしながら、第31回展に向けて準備を進めていきたい。

なお、本研究、特に前章での考察においては「往還的連関に向けた『鑑賞』を起点とした考察」と「制作の方法と過程の視点を持った考察」に焦点化しているため、あえて著してはいなかったが、熊本県立盲学校の児童・生徒の皆さんは様々なアプローチで、まずは美術・彫刻鑑賞の機会として、この「手でみるワークショップ」を楽しんでくれていたことを付記しておく。

### 【謝辞】

本稿の執筆・掲載にあたり、「手でみるワークショップ」に楽しんで参加して下さった熊本県立盲学校の児童・生徒の皆さんにあらためて深く感謝申し上げます。また、本事業にお力添えいただき、本稿へのご協力、掲載の承諾をいただきました熊本県立盲学校の校長先生をはじめとする教職員の皆様、関係者の皆様にも厚く御礼申し上げます。

### 【註】

- (1) 熊本県文化協会は、個人を単位に組織された熊本県文化懇話会を母体に昭和45年11月9日に設立され、熊本県内の文化関係の諸団体ならびに諸機関等の相互の連絡調整を図り、熊本の文化の育成発展に寄与することを目的に様々な事業を展開している。加盟団体は熊本県内の民間文化団体及び市町村文化協会を中心に現在250の団体が加盟している。(令和4年5月現在) 熊本県文化協会 HP「熊本県文化協会会則」、<http://kumageibunshin.or.jp/publics/index/26/>を参照。(2023年9月6日閲覧)
- (2) 運営は坂本も含めた県内の美術・工芸の関係者、学芸員、美術教育関係者を中心とした実行委員会によってなされ、出品は県内作家の作品を中心に大学生や高校生、中学生の作品が展示される。熊本県立美術館本館、もしくは分館を主会場とし、その後、天草会場(ふれあいスペース如水館：天草郡苓北町)、不知火会場(宇城市立不知火美術館：宇城市)を巡回する。また、この展覧会で特筆すべきは、視覚障がいの方も含めた各地域の特別支援学校生徒の作品も多数展示してある点にある。
- (3) 熊本県文化協会 HP「手でみる造型展」、<http://kumageibunshin.or.jp/publics/index/79/>を参照。(2023年9月6日閲覧)
- (4) なお、熊本県立美術館分館での開催を本展とし、2020年2月11日(火)～16日(日)の会期後、2020年2月21日(金)～3月1日(日)には天草展、2020年3月4日(水)～15日(日)には不知火展を開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症

- 拡大の影響により天草展は2日間のみの開催とし、不知火展は中止とした。
- (5) 坂本健、「触覚を意識した造形の授業実践に関する考察—「手でみる造型展」への参加を見据えた「専門研究Ⅰ・Ⅱ」における実践—」、『次世代研究 見やらい第17巻 臨時増刊号』、尚綱子育て研究センター、2020年・坂本健、「図画工作科・美術科における「触覚」の意識化の意味—学校教育におけるICT活用と「身体性」の相互作用的連関に向けて—」、『崇城大学芸術学部研究紀要 第16号 2022年』、崇城大学芸術学部、2023年
- (6) 坂本健、「造形教育におけるテクスチャー再考Ⅰ～造形遊びから図画工作科・美術科教育までにおける価値概念について～」、『次世代研究 見やらい第17巻 第2号』、尚綱子育て研究センター、2021年・坂本健、「彫刻におけるテクスチャー—近代彫刻から見る価値概念の再考と整理—」、『崇城大学芸術学部研究紀要 第15号 2021年』、崇城大学芸術学部、2022年・坂本健「造形教育におけるテクスチャー再考Ⅱ～幼稚園教育要領（平成29年告示）との照合と価値概念の考察～」、『次世代研究 見やらい第19巻』、尚綱子育て研究センター、2023年
- (7) 坂本健・本多由佳梨、「視覚に障がいを持つ児童・生徒を対象とした彫刻領域における『表現』と『鑑賞』に関する研究—『手でみる造型展』におけるワークショップとギャラリートークの実践からの考察—」、『次世代研究 見やらい第17巻』、尚綱子育て研究センター、2020年
- (8) 同書、p.57
- (9) 同書、p.53
- (10) 同書、p.57
- (11) 同書、p.54
- (12) 同書、p.53
- (13) 全国盲学校長会 編著、『新訂版 視覚障害教育入門 Q&A —確かな専門性の基盤となる基礎的な知識を身に付けるために—』、ジアース教育新社、2018年、pp.77-79を参照。
- (14) 坂本健・本多由佳梨、前掲書、p.57
- (15) 同書、pp.53-54
- (16) 日野あすか、「日本の盲学校の美術・造形教育の実態調査」、『美術教育学：美術科教育学会誌 第26号』、美術科教育学会、2005年・岩城美智子、「教科・領域の教育（中学部・高等部）視覚障害児・生徒に対する鑑賞指導のあり方—より豊かなイメージを持たせる—表現と鑑賞について関連を図った指導の実際」、『視覚障害教育ブックレット』、筑波大学附属盲学校視覚障害教育ブックレット編集委員会、2008年・海老塚耕一、岩崎清、渡辺達正他、「視覚障害者に対する芸術鑑賞の方法」、『多摩美術大学研究紀要(26)』、多摩美術大学、2011年 等
- (17) 半田こづえ、「視覚障害のある高校生の彫刻鑑賞における対話的支援の役割」、『日本美術教育研究論集 = Japanese journal of art education (51)』、日本美術教育連合、2018年・半田こづえ、宮本温子、「触覚による彫刻鑑賞における鑑賞過程：視覚障害のある鑑賞者の発話プロトコルに基づく分析」、『美術教育学：美術科教育学会誌 第39号』、美術科教育学会、2018年 他
- (18) 熊本県文化協会『手でみる造型展 15年

- の歩み』編集委員会、『手でみる造型展 15 年の歩み』、熊本県文化協会、2005 年・熊本県文化協会『手でみる造型展 30 年の歩み』編集委員会、『手でみる造型展 30 年の歩み』、熊本県文化協会、2020 年
- (19) 吉川瑠美、「手で見る造型展の意義に関する一考察」、『平成 17 年度 熊本大学大学院教育学研究科修士論文集』、熊本大学大学院教育学研究科、2006 年
- (20) 坂本健、『『手でみる造型展』の省察と展望』、『尚絅大学研究紀要 人文・社会科学編』、学校法人尚絅学園、2023 年
- (21) 地方美術の発展と後進指導を目的として 1946 年に結成された。作家の個性を大切にし、会員・会友、そして一般出品者で構成する公募展を毎年開催している。
- (22) 熊本県立美術館の「美術館建設準備委員会」の委員でもあった坂本善三・田代順七・三浦洋一らが県立美術館建設に併せ、美術活動に携わる美術家それぞれの芸術上の主義・主張を越えて団結し、美術館のために活動をすべきではないかとの考えから 1970 年に結成された。美術館建設とその後の運営に協力をしながら、美術家同士の親睦や協調、さらに熊本の美術文化振興への役割を果たしてきた。主な活動としては「美連展」の開催や「年末助け合い愛の色紙展」の開催、そして「美術講演会」を開催している。また、熊本県立美術館の活動を応援するための定期的な美術館側との懇談会も継続している。
- (23) 坂本健、『『手でみる造型展』の省察と展望』、2023 年、pp.63-64 を参照。
- (24) 熊本県文化協会『手でみる造型展 15 年の歩み』編集委員会、2005、前掲書、pp.28-29
- 実際には点字で書かれた手紙であるが、平仮名を併記した形で写真が掲載をされている。
- (25) 同書、p.32 を参照。
- (26) 坂本健、『『手でみる造型展』の省察と展望』、2023 年、pp.65-66 を参照。
- (27) 同書、pp.66-67 を参照。
- (28) Fiber-Reinforced Plastics の略。強度を増すことを目的として、樹脂の中にガラス繊維等を入れた複合材料。
- (29) 文部科学省、『特別支援学校幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領』、2018 年、p.121 及び p.172 他
- (30) 文部科学省、『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 図画工作編』、2017 年、p.125・文部科学省、『特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）』、2018 年、p.216 他
- (31) 坂本の前掲書「造形教育におけるテキストチャー再考 I ～造形遊びから図画工作科・美術科教育までにおける価値概念について～」、p.108 においては、美術におけるテキストチャーを以下のように定義した。
- 「質感」、「材質感」、「素材感」等という表面の質をあらわすものであると同時に、視る者それぞれの体験に基づき、意識的にせよ、無意識的にせよ導き出される触感覚を視覚的に訴えかけるものであると言える。そして、この美術におけるテキストチャーとは、四大造形要素として挙げられるべき、造形に係る原初的、且つ基礎的な要素として捉えることができる。

ただ、本研究においては視覚に障害のある児童・生徒が対象であるため、視覚的な要因は除くこととなる。

- (32) 粘土原型を型どりし、蠟に置き換えた後、その蠟型を耐火石膏で内と外を覆う。それを焼成することで蠟が焼失して鋳型を作成する。その蠟の在った空洞に溶かしたブロンズを流し込み、冷却・硬化したのちに鋳型を壊して取り出す。
- (33) 上記の内、湯（溶けたブロンズ）を流し込むための道となる部分。蠟型に、湯が全体に流れ込むように棒状の蠟を取り付ける。鋳造後、余分な箇所として切り取る。本作品においては、作品を設置するに際して邪魔になる部分のみを切り取っているため、内側に湯道の跡が残っている。
- (34) セメントに砂と水を加えたもの。コンクリートはセメントに砂、砂利、水を混ぜたものであるため異なる。コンクリートの方が強度はあるが、モルタルの方が柔軟性があり、本作品で使用している。
- (35) 蠟型鋳造を例にすると、その工程において粘土原型→蠟型→ブロンズと素材を置き換えていくが、蠟型の段階において造形的な意識を持った付加的制作を行うことがある。このことにより、蠟を付けたり削ったり磨いたり、直に蠟で形を作り出して作品に組み込むということも可能となり、そこには蠟という素材の特性が打ち出されてくる。
- (36) 文部科学省、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 図画工作編』、2017年、p.3 他
- (37) 吉川、前掲書、p.14

(38) 教育機器編集委員会編、『産業教育機器システム便覧』、日科技連出版、1972年、p.4の「図1・2 五感による知覚の割合」本文献は古いものではあるが、視覚が上位の感覚として扱われるその論拠とされるものであるし、様々な割合として数値化されたものは諸説あるが、いずれにしてもその多くの割合を占めていることに変わりはない。

(39) 吉川、前掲書、p.15

(40) 同上

#### [図版出展]

図1・2 坂本健、『『手でみる造型展』の省察と展望』、p.66

図3・4 坂本作成

図5～14 坂本撮影

表1 坂本・本多・熊本県文化協会吉良氏・熊本県立盲学校の先生方の観察・聴き取りを基に坂本が作成